NTRビッチ化した婦警の嫁にマゾ調教される音声

おまけ

本編視聴後に読んでください

本作品はあくまで架空のことをえがいたものであり、現実に存在する人や組織とは関係がありません。またこの小説は大人向けのものであり、子供は読むべきではありませんし、子供に見せるべきでもありません。

加えて、作品内で描かれる描写の多く、例えば女性の同意を得ない性行為、心神喪失や心神耗弱状態の女性への性行為は実社会で実行すると刑法によって厳しく罰せられます。

目次

キャラクター紹介……4
一月：あるチャラ男の歪んだ人生観……5
五月：フライデーナイトフィーバー……14
六月：取調室の情事……40
七月：任務中の情事……52
八月：旦那の出張中に…　……70

キャラクター紹介

明河順子

如月市の巡査。性犯罪に厳しい真面目な婦警さん。長年付き合っていた彼氏がいてそろそろ結婚の話も出ている。

下川沢亮二

歪んだ価値観を持ったイケメン。ホストクラブバタフライエフェクトの一番人気だが、ホストとして働くのは趣味で生活自体は貢がせたお金で成り立っている。

一月：あるチャラ男の歪んだ人生観

女なんてどいつもこいつもただの道具でしかない。恵まれた男にとって女は都合のいい性処理道具であり、なんでも命じられる小間使いであり、奴隷のようなものだとオレはマジで思っている。ここでいう恵まれた男ってのは何もイケメンに限らない。金があったり、権力があっても同じことだ。

ただ、オレは生まれたときから顔は良かった。中学一年の時にセンパイの女子に逆レイプされて童貞をなくす程度にモテていたのだから誰も否定出来ないだろう。更に加えて言えばそれだけ小さいときからハメまくっていればテクもかなりなものだ。スタートラインが違えば恵まれた男は更に強くなる。もしオレがブサイクだったらエロいこととも縁遠く、そういうテクとも一生無縁だろう。金持ちは金を投資して増やすだろうし、権力者は権力をさらに強化するだろう。恵まれた男は更に恵まれるために努力しなくてはならない。

オレの場合それはコミュニュケーションだった。大学時代ホストのバイトをガッツリやった。大人のメス共の相手をして、メス豚の褒め方や見極め方もそ

れなりに覚えた。とはいえ女なんてただの道具でしかないというオレの価値観を変えたことはないし、隠したことさえない。
最初はそんなの冗談だと考えてリョージ君ってのなのね、などと澄ました顔をしている。だが、一回か二回抱いてやれば本当にオレがそう考えていることを理解して、しかもオレの道具になりたがるもんだ。
眼の前にいる女もそういう道具の一つだ。
「聞いてるの？下川沢亮二！あなたはあの子が未成年だって知ってたんでしょ？」
ツンとしたきつそうな面で気が強そうな胸を青い警察の制服の下に隠している。うまそうなメスだ。そんなふうにキレたふりをしてもどうせやることやって男とちちくりあってるんだろ？せっかくチンポ咥えるんならオレのを咥えろよ。体験したことないくらい気持ちよくぶっ壊してやっからよ。
そんなことを思いながら、その女の目を見る。目と目が合う。相手の瞳にオレのなかなかイケメンの顔が映る。若干乱れた髪の毛が気になる。後で直さなければ。
「いや、知るわけっしょ。アイツが何歳かなんて」

「あんたねぇ、そんなわけ無いでしょ。制服着てたわけだし」
「イマドキ、制服なんてただのコスプレアイテムっしょ。AVとか風俗とかの制服着てるメスも全部未成年なんすか?ってか、婦警さんだって学校の制服着てのコスプレセックスぐらいしたことあるっしょ?カレシとか旦那さんとかと」
「メスって…。そんなのあんたに関係ないことでしょうが!」
更に怒鳴りつけられる。これはあんまりエロい経験してないヤツだ。そこそこ年齢いってるのに人生損してるね。そんな堅苦しく生きてて下の方もキツキツっすか?そんなことを思うと思わず笑みがこぼれてしまう。
「あんた何笑ってるの?ふざけないで!だいたい学生証まで持たせてる写真があんたのスマホから出てきてるのよ」
「いやいや、名門校の学生証とかいまどきネットでいくらでもそれっぽいの売ってるじゃないスカ?コスプレのフレーバーのための小道具に一々ケチつけるとか婦警さんマジで世間知らずなんすね」
ちなみにいまオレがこんな事になっているのはたまたまとある有名私立のSNSで遊んじまったからだ。いや、オレはわるくない。向こうがチンポ咥えた

そうな顔をしていたから、ボランティアでちょっと遊んでやっただけだ。ただ、たまたま一部始終を先公が見ていたってだけで。
「あんたねぇ、自分のしたことの意味がわかっていないわけ？」
身を乗り出してキレているメス。そんなにオレに近づきたいんすか？基本、メスってのは自分の気持ちを自分で理解していない存在だっていうのがオレの人生から学んだことの一つだ。身を乗り出してきた女の頭を掴んで、その唇にオレの唇を重ねてやる。
「んんん！ちゅっ…ぷぷぷぷ…れろぉ…」
直後バチーンっと甲高い音が取調室に響き渡る。オレの頬がジンジンする。せっかくキスしてやったのに、拒絶してオレに平手を食らわせてきた。まぁ別にこんなことでオレはキレたりしないけどね。すこし誤作動した道具に感情的にキレた所で道具が治ったりしないからだ。
「あんたねぇ、一体何を考えてるのよ。これは完全な強制わいせつ罪の現行犯よ！」
そう言いながらも身を乗り出してオレのことを凝視してくる婦警。コイツは理解してなくてもメスの本能がオレという男に反応しているのだ。

「イヤイヤ、パートナーとコスプレセックスもできていない可愛そうなメスがいたもんで、可愛そうだったからついやっちゃったんすよ。いやだったんすか？絶対欲求不満な生活送ってるんでしょ」
「そんなことあんたに関係ないでしょ！」
そう言いながらもオレの匂いがついた唇を拭いたりしていない。
「だいたいねぇ、あんた女性を道具みたいに扱ってそれでよく今まで生きてこれたわね。世間知らずにもほどがあるわ」
「いやいや、メスってオスの道具っしょ」
あー、そういうふうに勘違いしてイキってるのか、この婦警さん。いままで勘違いして生きてきたのはそっちの方なんだよな。口では建前を言っても心も体も実はオレに抱かれたいと思ってるくせに」
そこで、取調室の扉がノックされた。
「明河先輩、そろそろ交代の時間ですよ」
そういって別の婦警が入ってきた。そいつと目が合った瞬間ときが止まる。
ああ、見覚えのある顔だ。オレの童貞を奪った下山センパイだ。思わず口角が上がる、いいねえここの警察署。いろいろ楽しいじゃんか。

「お疲れ様。コイツ結構ヤバげだけど、大丈夫？」
「大丈夫です！センパイ」
そう言う。ずいぶんいろいろでかくなってるじゃん。
「おいおい、何が大丈夫だって？」
一〇分後、オレの腕の中の下山センパイに聞く。最初にオレの童貞を奪ったときと比べると流石にでかくなってすっかり可愛らしくなっちまったもんだ。
「んん…手の動きがやらしいよぉ…リョージ君が悪い人じゃないってセンパイ知ってるし」
「乳首おっ立てながら何いってんすか、センパイ」
「ん…くふぅ…だってぇ、久しぶりのリョージ君なんだもん」
紺色のスカートに包まれた形の良いケツがオレのチンポにグリグリ押し付けられる。
「まったく、後輩をレイプしてくる発情メス犬がケーサツとかどうかしてるんじゃないっすか」
「ふんっ…だってぇリョージ君がいたら仕方ないじゃない。女子はみんなリョージ君に抱かれるために生まれてくるんだから♡」

「じゃっ、さっさとココ出てホテル行きましょうよ、メス犬先輩」
主人に尻尾を振る犬のようにオレのチンポにケツを押し付けている女にそういう。
「だ～め、まだ私の勤務時間だから、リョージ君の取調べするのぉ…♡んんっふぅ…乳首クリクリされちゃってるぅ」
女の体がオレの手の中でどんどん熱を増していく。さっき上司の前でキチッと人間らしく振る舞っていたのがもう完全にオレの腕の中でメス犬に成り下がっている。
「いっすよ。でも取調べするのはオレっすから」
そういってオレのチンコを逆に押し付けてやる。
「きゃふぅん…いいよぉ。なんでもセンパイ、答えちゃうからぁ」
「じゃぁ、さっきのメスのことを教えてくださいよ。そしたらイカせてあげるっすから」
そういって胸をもんでいた右手を下山センパイの下半身におろしていく。警察の制服のタイトスカートの下にオレの手が侵入していく。

「はぁぁん…セツナイよぉ…。明河先輩のことですかぁ…んん。彼氏いるみたいですよ。結婚するとかしないとか…んんっ久しぶりのリョージ様のゆびぃ」
「なんか弱点とかないっすか?」
そう言いながら手探りで昔なじみの股間を弄る。ショーツの上からでもわかるほどに湿っていて、その尖突はすでに膨らんでいる。ショーツの上から親指と中指でコリコリとその突起をしごきながら中指で爪を立てる。
「んんふぅぅっ…知らない!知らないですぅぅ!す…んんふぅ…すごい厳しくてぇ…隙がない人なのぉ…あんっんんふはぁぁぁ…弱い所擦り上げられちゃってるぅ!」
その次の瞬間一気にショーツの湿り気がまして人肌に暖められた液体がオレの手に触れる。オレの腕の中で軽く痙攣する先輩。
「取調室でイッちゃったんすか?センパイ」
わざと呆れたような声を出して、センパイのイキ汁で濡れた指を見せつける。
「もー、リョージ君のいじわるぅ…」

すねたような事を言いながらも嫌がらない下山センパイ。まっ、都合のいい道具がこんな所に落ちてるなんて意外だったけどやりやすいに越したことはない。

五月：フライデーナイトフィーバー

金曜日は普段出勤日だ。だが、今日は休みをとった。

理由？そんなの聞くまでもない。オレはオレの信念を証明する。メスなんてどいつもこいつもオスに奉仕する道具でしかないと。ガキだろうがババアだろうが同じだ。そのことを理解していないオスに飼われているメスは不幸すぎる。だからオレは時々そういうメスをボランティアで幸せにしてやる。

あの婦警、オレのことを全否定したアイツに今日は幸せを教えていやる。

夜の街、無数の光が夜空を照らす。飲み屋街、そこに二人の女たちがいる。スーツを着込んで硬そうな表情をしている。たぶん上司のお酌に疲れて、飲まされまくったんだろう。メスがオスの道具だというこの世界の真実を理解しないで拒絶するから疲れるんだ。はじめからその役割を受け入れれば楽しく生きれるのに。

「あ、そこのキミたち、かわいいね。ちょっとつらそうだけど大丈夫？手伝おうか？」

そう声を掛ける。ジュンコとかいったあの警察官がキッとオレを睨んだ。普通のナンパ師ならそれで威嚇できるかもしれないけど、オレは違う。何よりオレは今晩中にオマエを犯すと決めているからだ。
「あ、この間のケーサツじゃん。ひさしぶり～!こんなところで会ったのもなんかの縁だからさ、助けようか?近くに知り合いがやってるホテルがあるんだよ。そこなら横になれるよ。ほら、足元もおぼつかないんだからさ」
「そんなこといって～、あんたの魂胆はみえてんのよ～」
微妙にろれつがまわらない声で順子が言う。
「大丈夫ですよ、先輩。私もついていきますから、ここはコイツの言葉に甘えましょうよ。終電までに駅に着けそうにないですし」
そう順子の隣の女、オレのセンパイが言う。
「んん～、らめよ～。アイツはやばいんらって～」
そうそう、オレはヤバイくらいオマエを気持ちよくしてやれるんだぜ。
「ヤバイのは先輩ですよ。大丈夫です、私がちゃんと見張っておきますから。二人なら大丈夫でしょ?」
「んん～、そうかしら。…気持ち悪い…」

「ほらほら、行きましょうって」
「しかたないわ～。本当に見張っておいてね」
バーカ、ソイツはオレの調教済みのセンパイだってーの！心の中で爆笑するオレの声はもちろんジュンコに届かない。事前に取っておいた、高級ホテルのスイートに連れて行く。お前なんか場末のラブホで十分なんだが、はじめくらいいい夢見せてやるぜ。どーせすぐにホテルじゃなくてもハメられる女になるんだからな。
それに最初はきちっとオレの財力を見せつけておかなきゃな。メスってのはオスの金の使い方で判断するからな。ブランド物の服に高級ホテルのスイート。お前にはもったいない夢を見せてやるぜ。まぁ、そんな夢を見るより早くザーメンに溺れるかもしれないけどな。
「大丈夫です。準備できましたリョージ君」
そうセンパイがそっと隣で声をかけてくる。ベッドで横になったらしい。
「わかった。お前は隣の部屋でなんかあったときのために待機してろ」
チュッと軽くキスしてやる。それだけでセンパイの顔が嬉しそうにほころぶ。

そいんじゃっ、いただきますか。
すっかり寝こけてしまったらしく平和な寝息をたてている婦警さん。ジュンコだっけ、まっ名前なんてはじめのうちしか意味がない。俺のものになっちまったらマンコだろうがセフレだろうが好きなあだ名で呼ぶことになるからな。
まずはホテルから逃げ出せないようにわざとスーツを切り裂く。タイトスカートの正面に大きな切込みを大きめのサバイバルナイフで入れて、ストッキングとショーツを切り裂いて恥ずかしい場所を露出させる。ジャケットとシャツは閉じないようにボタンを全部切り裂き、ブラは細かく切り裂いてしまう。こんなにしてるのにまだ寝ているとはなかなか神経が図太い。そういう女ほど一度ぶっ壊してやると使いやすく変えやすいから俺は好きだ。
ベッドの上に肌を露出した女が寝ている。男を誘うように寝息と彼女の胸が連動して上下する。
俺はベッドサイドの手の届く所において、彼女の体を楽しみ始める。俺の手に吸い付くような丁度いいサイズの乳房だ。乳首の色素が薄いあたりあまり使っていないし、ましてや出産もしていなさそうだ。ということはつまりコイツは本当のオンナの喜びを知らないってことだ。

「すぅ…すぅ…すぅ…んんん」
桜色の乳首を俺の指の中でかるくなぶる。感度も悪くない。
「すぅ…んんっ…ふぅん…」
乳首を転がすだけで寝息に艶めかしい物が交じる。かすかに勃起しつつあるその部分をチュッと吸う。軽く甘噛しつつ舌で先端をくすぐってやるとすぐに硬く勃起し始める。
なんだ、コイツお硬い割に体はなかなか敏感じゃねえか。面白くなってもう片方も同じ様にする。ただし今度は歯型が少しだけ残る程度にキツめに。
「んん…ふぅ…んっ…すはぁぁ…ぁぁん」
まだ起きる気配はない。オレの方もそろそろ準備するために全裸になる。鍛えているから並の男よりも筋肉があるし、中坊のときから使ってきた自慢のオスの象徴は早くこのオンナを侵略したいと滾っている。
左手をジュンコの股間に回す。切り裂かれたスカートやパンツの切れ端の間からジュンコのいちばん大切な場所を探り出す。ジュンコってかオンナにとっていちばん大事な場所だ。チンポを咥えてガキを孕む場所だ。
オレの指の腹がそこをなでる。

クチュッ…
既に湿ってやがる。慣れた感じで割れ目をなぞる。中指の感じで使われ具合を測る。やっぱりあんまハメていない、もう少し濡らしといたほうが良さそうだ。勃起しかけのクリトリスを手探りに探って親指の爪を立てる。
「んん…くぅ…んんふぅ…」
肉穴が甘い声をあげる。じゃぁそろそろお姫様には目を覚ましてもらおうかな。手探りに左手でジュンコのぴっちりと閉じているだろう場所を開く。せいぜい数人しか男を知らないコイツに本当のチンコってのを教えてやるために。ベッドの上でこんなにボロボロにされながらも未だに寝息を立てているメスの唇を奪う。その状態でジュンコの鼻をつまむ。息をするために口が開くから、一気に舌を入れる。
「んんんぐっっっ」
お姫様が目を覚ましたので右手でつまんでいたジュンコの鼻を開放し、代わりにナイフを見せつける。人間を脅す時は銃よりナイフのほうが実は効果的だ。痛みが容易に想像つくせいで動けなくなるからだ。

ナイフを首に当てながら舌を絡みつかせる。イヤイヤという感じで目をつぶる。健気にも涙さえ浮かべている。
「んちゅ…ちゅる…じゅぷっじゅるるる…」
怯えるオンナの口内ってのはなかなか征服した感じがして好きだ。媚びるわけでもないし、抵抗するわけでもない。ただ全てがオレに明け渡されてる。大抵のオンナは今さえ耐えられればいいと思っている。だが、それは違う。
舌先で口の中、上部を軽くなでてやる。脅されて緊張しているジュンコの体がオレの体の下で震える。舌を無理やり絡めて、舌裏を愛撫してやる。嫌がりながらも目尻がかすかに下がる。このメスは感じ始めているんだ。
「お硬い婦警さんもキスには弱いんすか?」
唇を離してそう言ってやる。すぐに元の怒った顔に戻る。いつまでそれができるかな。オレは心の中でそう嘲笑する。
「やっぱりあんた、これが目的だったのね」
「オスがメスを寝床のある場所に誘うなんてそれ以外ないっしょ。何いってんすか?ジュンコさん、アンタだって孕まされたくてホイホイついてきたくせに」

きっと睨みつけてくる。半裸でマンコをオレに開かれながらすごんだって全く怖くないけどね。
「あんた、覚悟しなさい。いままで脅して好き放題やってきたんでしょうが、私はそうは行かないわ」
「じゃぁ、オレはきっちりアンタをオレのチンポで躾なきゃいけないっすね」
そして一気にオレは腰を落とす。狭いオンナの穴を一気にゴリゴリ突っ込む。多少濡らしておいたせいで少なくとも入り口はなんとか入る。
「んんんっ、やめなさい!やめっ…、ええ…な、何これ…」
キレかけたジュンコの顔が怒りよりも驚きに塗りつぶされる。
「どっすか、本当の男のチンコは?」
「や、やめなさい…んんっこ、こんなの入らない。こ、壊れてしまう…」
亀頭が夏のビーチで砂を掘り進むように熱いメスの肉を無理やり掘り進む。そうとう慣れていないらしく狭くて仕方ない。
「へぇ、…じゃぁ壊れちまえばいいんじゃないすかね。チンポがハメられない穴なんて不良品でしょ」
そう言いながら空いた左手でジュンコの左手首を掴む。

「んんんん…ひっひどい…ふはぁぁ…」
「大丈夫っすよ、ちゃんとジュンコのマンコは使える穴っすから。けど、浅いっすね。彼氏のチンコでもっと子宮口押し上げられてるもんだと思ったんすけど」
そう言いながら手近な位置にナイフを放り投げて、ジュンコの右手首も掴む。たったこれだけのことでオンナは抵抗できなくなる。チンコを咥えこんじまったら後はすぐってわけだ。
「んんっ…痛い…。余計なお世話よ！」
「大丈夫っすよ。すぐに気持ちよくするんで」
そう言ってオレは彼女の中に入っているオレの一物を誇示するようにぐりぐりしながらうなじを舐める。
「嫌ぁ…気持ち悪い…んんふぅ…」
拒絶しながらも甘いものが既に混じりつつあることに彼女はバカだから気が付かない。
「んっふぅっ…太いぃ、痛いのにぃ…そこ吸わないでぇぇ…」

更にグリグリ押し付けていく。もうとっくに彼女のオンナの部分は本能に火がついているはずだ。狭いジュンコの膣肉がキュッキュッとオレのものを抱きしめ始めている。うなじをなめながらゆっくりとした抽送を開始する。
「まだ痛い？」
そう聞きながらゆっくりとストロークを開始する。
「あああっ…やめてぇ…はんっっ大きいのぉぉ」
痛いとは言わないジュンコ。既にオレのチンポに馴染みつつあるのだ。
「ふはぁ…あぁんっ…今ならまだ大丈夫だからぁ…はぁんんっ。やめ、やめなさいぃ…ひゃぁぁんん」
もうとっくに一線を超えちまってるのに寝ぼけたことをいってる。更に誇示するために一度浅い所に戻して突き上げる。
「ひゃっ、だめ、だめ、だめえええ！んんっふぅぅー！太いの！太いのだめえ」
「ダメじゃねーよ、いいんだろーが。チンコで突くたびにキュンキュンしてるくせに」

「はんっんんっしてない！してにゃいいい！キュンキュンなんてしてないい」
そう言いながらもジュンコのマンコは実際締め付けてきている。突くたびに軽く震えてデカチンポのザーメン欲しいと本能が言ってしまっている。
「バーカ、お前は感じるしかないんだよ」
ガンガンジュンコのキツマンを責めてやる。そのたびに震える白い体がエロくて仕方がない。
「んふぅっあああんー！おかしい！おかしい！おかしいいのおおー！あふぅんん」
甘い声を漏らしながら今まで感じたことのない快感に戸惑うオンナだ。
「おかしくねーよ。オンナってのはマンコ犯されたら好きになっちまうもんだろ？」
「んんふぅぅ！やめてぇ！そんなこと、そんなことないのぉぉ！好きでもないにょにぃぃぃ…」
感じながら声を震わせる彼女の声はもはや男を拒絶しているものじゃない。むしろチンポを欲しがるメスのものだ。

「ばーか、メスってのはチンポでハメられた後に恋に落ちるもんなんだってオレが教えてやるよ」
「んはぁぁ、そんな、そんなわけにゃいいい!ダメ、ダメぇぇ、好きでもないのにいいいい!んはあああああ!」
膣がキュンと締め付けてくる。もうこのメスの穴は俺の肉に恋しちまってる。もっともっとヨガらせてやる。
「イッたろ?オレのチンポで」
そう聞いてやると蕩けた顔でにらみながら否定する。まー、まだ一回目だからこんなもんか。イッた直後の敏感肉穴を更にガンガン行く。
「んんんっ、イッれない!イッれないのぉぉ!んんはぁぁ!あんっ!!はんっ」
パンパンパンっと夜のホテルに肉がぶつかりあう声が響く。拒絶していたジュンコは絶頂で全身の力が抜けていた。うなじから首筋にかけてゆっくりなめながら徐々に乳首に向かう。
もちろん下半身は責めまくる。

「ひゃぁぁんんっ!やめろぉ!おかしいおかしいのぉぉ!ふ、太いのぉおかしいのぉぉ!乳首!乳首吸わないでええ!んんふううう」
叫びながらも彼女の体は快感に震え続ける。オレのチンポはさっきまできつくて動かすこともできなかったのに今では分泌された愛液のせいでガンガン浅いジュンコの奥を責められるようになってる。
「な、何これ…んんなっ…し、知らない…あぁんんっ、こ、こんなの私知らにゃないぃぃ……!!」
俺のチンポをくわえ込みながら叫んでいる声はもうとっくに快楽にまみれてしまっている。
「ひゃぁっ、やめて!んあぁぁ…やめてええ!怖い!怖いのおお」
怯えるのはいい兆候だ。オスの力を自覚しつつあるってことだからな。そして本人が嫌がろうと、もう彼女の体は俺を求め始めている。キュッキュッとチンコを打ち込むたびに膣肉が絡みついてくる。
「いいぞ、ジュンコの体いいよ。俺のチンコにぴったりだ。1ミリの隙間もねえ」

実際ピッタリどころか狭すぎるし浅すぎるが、どうせすぐにピッタリのサイズになるんだから同じだろ。
「ああんん、ダメッ…んんふぅ…ダメだぁ…やめろおお」
そう口ではいいながらも動くことはない。むしろ快感に全神経が集中しちまっていて動けないんだ。もちろん彼女の両手を俺が掴んでしまっているせいもあるが。パンパンっと激しく突き上げるたびにピクピク震えるジュンコの体。
「んふっ…ふはぁ…太い！太いのぉぉ…んあああああ！」
再びキュッと膣肉が震える。
「あ、ジュンコ2回目イッたっしょ」
そう言ってハメたまま一度手を離す。
「はぁはぁはぁ…」
荒い息遣いが室内に響く。俺は油性マジックで横たわる彼女の頬に正の字を途中まで書きつけ、体力が回復しないうちに再び同じ体位で突き上げを再開する。
「んふぉぉぉ！ちょっ、まってぇぇま、まだ弱いのぉぉ！お願い、少しぃ、少しだけでいいからぁ休ませてええ！！あぁぁん！」

喘ぎながら懇願するジュンコ、もちろんいうことを聞くはずがない。女の願いなんて聞いたら図に乗るだけだ。はじめのうちは休憩のタイミングも全部オレが決める。そうやってどっちが上か躾けるんだ。
「ダメ、ダメぇぇ!壊れる!私壊れちゃうううううう!はぁぁぁん」
「壊れろ!壊れちまえ!オレが作り直してやっからな!イクときはちゃんとイクって言えよ」
ガンガン突き上げる。わざと水音を立ててやる。
「んんんああっらめっ!らめえええええ!まら、まらイッちゃうううう!んああああ、イってる!イッてりゅうううう」
３回目だ。もう嫌とかダメとか言わなくなっている。それどころかたった三回で命令通りイッたことを自己申告し始めた。いいメスだ。すぐにオレのメスになるだろう。そう思いながらそろそろ絶頂に近づいてきたオレのチンポを激しく挿入する。飛び散る愛液とビブラートするジュンコの喘ぎ超え。
「んはっっっ!あああ!すごい!すごい!太いのっっすごいぃぃぃっ」
「ほら、デカチンポって言えよ」

そう言って彼女の両手を離し、抱きかかえる。座位の体勢だ。これならさらに奥深くまでチンポが入るし、もう何度も絶頂して4回目も近いジュンコは手を離しても抵抗しない。
「ひゃぁぁ!やらっ!いわにゃいぃ!いわにゃぃぃ!デカチンポにゃんてぇぇ言わにゃいけろぉぉぉ、しゅごい、しゅごいいいい!奥まれきてりゅうううう!!!」
オレの腕の中で震えながら快感を貪るオンナ。お硬いケーサツのオンナがすっかりオレのよく知るありふれたメスになっちまってる。デカチンコであんあんヨガりやがって。
「じゅんっっ!じゅんっってぇきてりゅうううう!わけわからにゃくにゃっちゃうううう!んんふほおおおお!これ、これらめなのおお」
「彼氏のチンポよりいいっしょ」
「んほぉぉっ、しょんな、しょんなことにゃいいい!あの人のほうがぁイイのおおお」
「これよりか?」
一番奥をグリグリしながらさらに責める。

「んふぉぉ！しょう！しょうにゃにょおお！このデカチンポよりも！あんっあの人のほうがいいにょお！」
思わずデカチンポと口走るジュンコ。オレは密着した体勢でグリグリ子宮口をつく。
「あああああ！っすごっすごい！イク！イキュううううううう」
その直後、オレも絶頂する。ドクドクと温かく、よくしまったジュンコの一番奥にオレのDNAをマーキングする。
「え、えええ。ちょっと、あなたぁ！何を！」
中出しで一瞬正気に戻る。だが、出した直後でもまだ硬さが衰えないオレの一物で突き上げてやる。
「んんはっっっらめっ！らめええ！お願い！おねがいだかりゃぁ…あんん！中はやめて！中はダメなのぉぉぉ」
そう叫んでいる彼女の体を掴んだまま絶頂する。中出し、オレの激アツザーメンをうけて白い体が震える！
「ひゃぁ…あんっ！やめってぇぇ！あぁぁん！」

絶頂の甘い快楽に身を委ねることなくまだ硬さを残したままの状態のチンコをグリグリ突き立てる。
「んんっ!?はぁんっ!何で!なんで終わらないの!」
「ハハハ、そりゃ、お前の中が気持ちいからに決まってるからだろーが!ってかジュンコの彼氏って一回イッたら終わりの種無し野郎なのかよ!笑えるな!」
グリグリとベッドの上で抵抗するジュンコの体を押しつぶす。ケーサツやってイキガッてるメスに思いっきりオスのちからを見せつけてやる。マンコ越しに彼女の子宮を小突き回して屈服させてやるんだ。
「んふほぉぉ!やめっ!ふぁぁん!やめろおお!あぁぁんんっふぅ!」
拒絶とも喘ぎとも取れない人間の言葉とは取れないような惨めな絶叫。
「おらっ、コレがいいんだろ?オラッ!オラッ!」
そういってガンガン体重を載せてチンコを打ち込む!快感で気絶させないように感じさせ続けるのはコツが必要だ。
「ひゃぁっ、あん!らめぇ、デカチンコらめぇぇ!んはぁぁぁ、しょこっしょこはぁらめぇ!デカチンこらめぇ!」

とりあえずまずはデカチンコって言葉は覚えたわけだ、この勘違いメスは。
ベッドの上で快感に身動き取れずにあえいでいるだけの肉塊に口づける。お前の存在価値はオレのチンコのためにしかないってことを感じさせるために。
「あふぅぅん!んあぁっ!あっ、ひゃめぇ…んちゅ…した、舌入れないでぇ…ちゅぷっ、ちゅるる!ぷちゅっっ!」
抵抗できない口を侵略する。上と下両方で感じる中で女の体が本能的にオレにしがみつき更に密着する。そしてさらに彼女の快感が上がる。愚かにも今まで知らずに来たメスの快感がジュンコの全身をほとばしってるだろう。わざわざ嫌がる女にコイツを教えてやるなんて、なんてオレは優しいんだ。
「ふぐっ!んんんふはぁぁ!ああ…あひゃぁぁん!」
口づけした状態で再び絶頂を極めて震える体。本人は気がついていないだろうが、オレにしがみついて両足を腰に絡みつけてまで貪欲に快感を貪っていやがる。もう朝日がホテルの窓のカーテンの隙間から漏れているが、もちろん止めるつもりはない。
「あひゃぁっあ!あ!らめにゃにょおお!」
「イキそうか?オラ、イクときはイクって言えよ!ジュンコぉ!」

そう言いながらさらにズボズボ責める。つい5時間前まであんなにきつかった順子のマンコが広がって出し入れしやすくなっている。
「んあぁ！イグ！イグッ！デガチンコでぇイグウウゥゥ！！！」
オレの下でメスが喚く。デカチンコでイクか、すっかり新しい言葉が身についたな。
それからさらに6時間、ずっとこのメスを犯し続ける。もう4発は中に出しただろうか。抵抗することも諦めてただ快感に身を任せるようになったジュンコに忘れられないほどにオレの証を刻み込む。のどが渇いたら口づけで酒を飲ませてやる。腹が減ったら事前に持ち込んでおいた弁当を口移しで分けてやる。さらにシャワーを浴びて互いにオレの香水をふりかけ合う。ずっとつながったままだ。はじめは嫌がっていたが、無理やりマンコをズコズコつついてやればそれが『ルール』だと受け入れて言うとおりにし始める。メスなんてちょろいもんだ。
夕方、再び日が暮れようとしている時間。もう18時間繋がりっぱなしだ。ひょっとしたらコイツが彼氏とつながっていた時間を容易に超えてしまってい

るかもしれねえ。メスは長くつながっている男に本能的に惹かれるってのにな。
　ベッドの上、オレの下でつながっているジュンコ。もう抵抗しない、ゆっくりとスローセックスでただオレの存在感だけを知らせる。つながったままシャワーを浴びて、同じ香水をふりかけあった男女の肉体がまるで一つのものの様に繋がり合う。黒髪をなでる。もう初めのときのように抵抗しない。疲れているってのもあるだろうが、激しいことをしすぎて彼女の中でオレにされたくないことの基準が下がってしまったのだ。
「んん…ちゅっ…ちゅぷ」
　唇を重ねる。もう抵抗する気力も失っているため、簡単に舌が入る。舌を絡める。マンコがきゅっと反応する。これだけ絶頂しても欲深いオンナの体はまだ気持ちよくなれるのだ。
「ちゅっ…ちゅぷ…んちゅっ…ジュンコ、かわいいぜ」
　意識が混濁している順子に喋りかける。聞こえているかどうかはどうでもいい。弱ったところで刷り込むのだ。ひな鳥に誰が親かを刷り込むように
「はぁぁんん…ふぅ…ちゅっちゅぷぷ」

唇を重ねても抵抗しない。舌を絡めてもされるがままのメス。
「いいだろ?オレのデカチンコ?」
そう口づけした後で髪をなでながら言う。ゆっくりとただサイズを誇示するように腰を動かす。
「んんっ…いい…」
否定しないどころか肯定する。コレが成果だ。ご褒美に再び種付けプレスだ。中出ししまくったザーメンがグチュグチュ溢れて二人の体にまとわりつく。
「ングぐぐぐっっ!デカチンコでまらイカされちゃってるうううう…」
ため息のように甘くそういうジュンコ。
「そろそろ終わりにすんぞ!」
そういって最後にキスをする。フレンチキスじゃない唇を重ねるだけの軽いやつだ。チュッと唇を離す。オンナの唇は物欲しげに突き出されたままだ。
「じゃぁ、抜くぞ…どんだけ出たかな?」
鼻歌交じりで全身が弛緩しているジュンコの体からチンコを引き抜く。グポポポっとチンコを抜いた後で長時間圧縮され半固形化したザーメンがトロトロ

たれてくる。入れる時はあんなにぴっちり閉じていた彼女のマン穴はだらしなく開きっぱなしで白いものがこびりついた奥の奥まで丸見えだ。
ピロリロリーンっとスマホで軽い音を立てて写真をとる。
「やめて…とらないで…」
息も絶え絶えのオンナがなにか言ってる。
「大丈夫大丈夫、オレのコレクションにするだけだからさ」
そう言っていろんな角度から写真を撮って、ホテルのミニバーのミネラルウオーターのボトルを開けて飲む。長時間セックスで汗を書いて疲れた体に水分が行き渡る。飲みかけのそのボトルをジュンコに差し出すと嬉しそうにごくごく飲み始めた。昨日だったら多分オレの飲みかけの水なんて拒否しただろう。
「お前の服ボロボロにしちまって悪かったな。着替えの服はこっちにあっから着てみろよ」
そう言ってドサッと彼女の横に紙袋を置く。
「んん～、シャワー浴びてからぁ」
そう気だるそうにいう。消耗しすぎて立ち上がれないらしい。仕方がないから、引き起こしてやってシャワールームまで肩を貸してやる。様々な液体によ

ってドロドロになったジュンコ、歩くたびにポタポタとオレのザーメンが彼女の穴からたれて、高級スイートの絨毯にシミを作る。
「大丈夫か？」
シャワールームの壁に寄りかかった体に温めのお湯をかける。まだ敏感な肌が温水を浴びて震える。
「大丈夫じゃないわ。あんたのせいでね」
「その割に感じてるくせにな」
そう言いながら彼女の体を洗ってやる。エロいことはなしだ。ってか流石に中出ししすぎてオレの方もそういう気分じゃない。
「…」
マンコにシャワーを浴びせてオレの出したザーメンをかき出してやる。まあ一部はより奥に塗りつけておいたのは秘密だ。だがそうしている間すら、何も言わずにされるがままになっていた。嫌そうにふくれっ面をしているが抵抗らしい抵抗はしない。
「何、コレ？」
ジュンコが眉をひそめる。

「おー、イイじゃん。似合ってるぜ」
そういってキスしようとして拒絶される。別にビンタをされるわけでもない。ジュンコはオレのわたした服を着ていた。エナメルのホットパンツ、ボンテージ風のエナメルのキャミソールの丈は短くてへそ出しルックで、その上に格好いいエナメルのジャケットを着ている。まぁ、警察官よりストリップガールに似合いそうな格好ではあるけど。
「これじゃぁ、外出られないじゃない！」
そう言って恥ずかしそうにするオレのオンナ。
「そうか？オレはジュンコの鍛えられた体が好きだから似合ってると思うぜ」
そう言って彼女の割れた腹筋をなでてみせる。まっ、オレの女になればもっと女らしくなること間違いないけどな。チンポの上でヨガらせまくってメスホルモン出しまくりだから。
「うるさい！それに名前を呼び捨てにしないで！」
そう言ってはねつける。今までと違ってずいぶんメスらしいかわいい反応じゃないか。
「まっ、お前んちまでタクシー呼んでやっから。外出る必要なんてないしな」

そういって彼女の腰に手を回す。エナメルのホットパンツで強調されたケツ、白い肌がオレの腕の中にある。外から見れば完全に俺の女、情婦ってわけだが、本人は恥ずかしさに気を取られて気がついていないらしい。

六月：取調室の情事

「一体何の用ッスか?オレあれからなんもしてないんスけど」
そうニヤニヤしながら言ってやる。眼の前にはジュンコが複雑な表情をしている。あの日、ホテルでブチ犯してからジュンコとは会っていなかった。ただセンパイちゃんから状況は聞いていた。例えばコイツが彼氏と婚約したこと。そう聞いてオレは内心ほくそ笑んだ。
どいつもこいつもメスの考えることは同じだ。オレのデカチンコで感じちまって彼氏への愛が不安になったのだろう。罪悪感を隠すために彼氏と婚約、甘い甘い!もうお前はオレを忘れられねーよ!バカバカしいほどに短絡的、ひょっとしたら毎日彼氏に求めて、オレのチンコを忘れようと頑張っているかもしれない。そんなの無理なのにな。
「あんた、よばれた理由はわかってるでしょう?」
そうこの間オレのチンポの下でヨガっていたメスがすごむ。

「あー、アレっすか?オレがレイプしたのに、一ヶ月近くも訴えてこないバカ女がいるって話っすか?」
「あ、あんたねぇ…」
呆れたような顔。被害者のくせにそんなに身を乗り出して物欲しげにしやがって。身を乗り出したジュンコの胸を掴む。
「ひゃっ!」
可愛い声を出す。抵抗はしない。
「オレはまだるっこしいことって嫌いなんスよ。欲しいんスよね」
そう言って唇を奪う。
「ん…んむむむ…ちゅっちゅぷぷぷ」
ケーサツの取調室に淫らな大人のキスの音が響く。
「じゅぷっ…ちゅる…ぢゅぷぷぷ…れろれろ…。ちゅぷ…ぢゅるるる!」
オレの舌を拒否しない発情メスポリス。
「ぷはっ、すっかり発情してるじゃねーすか。彼氏さんに満たしてもらえてないんっすか?」
わざと当てつける。まだ踏ん切りがつかないようだ。

「ここじゃぁジュンコが聞きたいこと教えてやれねーな。もっと近くだったら喋れるんっすけどね」
鈍い女を促す。ジュンコが椅子を移動する。対面からオレの隣だ。まるでキャバクラのメスみたいな位置取り。オレが彼女のスカートに手を突っ込んでも何も言わない。
「一体何で呼び出したんすか」
逆に半勃ちのオレの股間にメスが手をもってくる。
「あんたが…あんたが…悪さをしないためよ」
「そっすね、オレ溜まると何スっかわからないスからね。ジュンコが抜いてくれるってわけっすね」
バカな女だ。それでごまかせてるつもりなのか?物欲しげにオレのズボンの上からチンコ触りやがって。
「そ、そうよ。仕方ないからあんたみたいな最低な人間はあたしが処理してあげるんだから」
「おっけー。じゃぁオレはお前の欲求不満なココを面倒見てやるな」
そういってパンツの上から既に湿りつつある割れ目をなぞってやる。

「んんん…んっ」
物欲しそうな吐息。
「はやく、チンコ扱いてよ」
「んん…いま、するの！」
そう強気に反論しながら、震える指でジッパーを下ろす。慣れない指使いだ。これからきちんと教育してやんないとな。ジュンコの手がオレのパンツの上からチンコに触れる。戸惑うようにしながらゆっくりと半勃ちのオレのチンコをパンツから引きずり出す。
「…えぇ…！？」
自分で引き出しておいてびっくりするとかウケるやつだ。まっ、大抵のメスが同じ様な反応をするけどな。
「どうだ、オレのデカチンコは？」
そう言いながらパンツの中に指を突っ込む。グチュグチュ期待して濡れちまってる彼氏持ちマンコだ。
「ひゃぁぁ！んんん…熱い」

「おいおい、見ただけで興奮してんのかよ！このビッチが。見てるだけじゃなくて、扱いてみせろよ」
クチュクチュくすぐってやる。よっぽど溜まってるのか、既にパンツの中は洪水だ。
「んん…。わ、わかった。こう？」
ゆっくり恥ずかしそうに上下して扱き上げ始める。恥ずかしそうな表情をしてもココが職場の取調室で、お前は我慢できずに勤務中に彼氏のものじゃないチンコしごいてるって事実は変わらねえのにな。
「下手くそめ、コレじゃあオレがお前をサービスしてやってるだけじゃないか」
「ひゃぁぁんん！」
Gスポットまでするりと指が入る。コイツあれから我慢できなくて相当一人でマンズリしてたな。あの時からずいぶん開発されてきてやがる。最初に抱いた時はあんなにピッチリ閉じてたのが今ではすっかりトロトロになっちまって。
「んんっふぅ、こ、こうか…」

「もっと強く握れよ。お前のマンコのほうがしまってるぞ」
「んん…だってぇ、これ…熱い…」
そう言いながらもチンコを握る手は止めない。オレの先走り汁がゆっくりと婦警の手を汚してクチュクチュと湿った音を取調室に響かせ始める。
「コレじゃねえだろ、ちゃんと前回教えただろうが」
ささやくようにそう促してやる。どーせコイツももう半分オレのものだ。
「…あああ、デカチンコ、デカチンコが熱いのよ！こ、こう？」
案の定さほど抵抗することもなくデカチンコと呼び始める婦警。
そして彼女の指がオレのデカチンコをゴシゴシしごき始める。
「ああ、そうだ…ちゃんと言ったとおりやれば気持ちよくしてやっからよ！」
「んん！はぁ、デカチンコ、デカチンコ…んんふぅぅ！」
確かめるようにそういう取調室の婦警。そしてデカチンコと言うたびに制服のスカートの下、パンツの中に突っ込んでいるオレの指がGスポットをグリグリこする。パイプ椅子が彼女の声に合わせてギシギシ音をたてる。
「あああ、デカチンコぉ…。んっふぅデカチンコ握ってる…。はぁぁ…仕事中なのにぃ」

「おいおい、何を今更、もうお前が仕事中にレイプ犯のチンコ握ってるって事実は変わらねえよ。割り切って楽しんじまえよ」
実際彼女の顔はとっくに赤いし、嬉しそうな笑顔すらしてしまっている。本人は認めないだろうがな。
「んっふぅ…言わないで！ああっ…あはぁんん！」
反論しようとする生意気な根性をグチュグチュ割れ目をかき回して快感で塗りつぶす。どう言い訳しようがお前はオレのデカチンコが欲しくてマンコ濡らしてるただのビッチだって～の。
「ほら、オレのデカチンコ握ってマンコ濡らしてるんだろ？言ってみろよ」
そうささやくだけでチンコを握るジュンコの手がさらにきつくなる。
「ほら、言って。繰り返すだけだって。簡単じゃん？『ジュンコはリョージ様のデカチンコ握って感じちゃってまーす』ってな」
「んんむむ…そ、そんなぁ…はぁん」
切なそうに喘ぎながらそういうが、体は火照って汗が浮かび、警官の制服が汗でエロい感じに張り付いちまってる。
「んぅぅぅ！…いやぁぁ…言いたくないのぉ！そこ、そこセツナイのおお」

「おっけー、ジュンコがちゃんと言えたらイカせてやろっかなぁ」
そう言って熱い肉壺の中でグリグリまん汁をかき出していた動きをフェザータッチに切り替える。すぐに焦らしに気がついて口を開くオンナ。
「だめ…だめ!だめぇ…止めないでぇ!セツナイのぉ…!言う!言うからぁ」
あーあ、全く浅ましいメスだぜ。あんだけすまし顔で拒否しておきながら気持ちよくなるためには簡単に裏切るってわけだ。
「オラ、言えよ!覚えてるんだろ?ジュンコ真面目だもんな!オラ、真面目に仕事中にチンコしごいてオレを気持ちよくさせろよ」
「あぁぁんん、ひどい…。ひどいのにいいのぉ…。ジュ、ジュンコは…」
口を開いた瞬間羞恥心でマン肉がオレの指をきゅっと締め付ける。
「リョージのぉ…あぁぁん…デっ…デカチンコ握って…ひゃぁっ…か、んん…感じちゃって…まーす…」
元気がない。だが、まぁ今日の教育はこんなもんか。オレが婦警の穴のGスポットをグリグリ刺激しながら更に親指でクリトリスに爪を立てる。

「ひゃあああ！いらっいぃ！いたいのにぃぃ…いい！あああ！すごい！すごい！すごいいい！こ、こんなの知らないいいのにぃぃぃ！あぁぁぁんん！イク！イク！イクぅぅ」
パイプ椅子の上で敏感にメスの体ががくがく揺れる。今にも白目を剥きそうな見事なイキ顔だ。
「はぁ…はぁ…はぁ」
快感の中で、単調にオレのチンコをしごいていた手を彼女の手を包み込む。
「おいおい、デカチンコってのはな、こう握るんだぜ」
白手に包まれた手をオレの手が覆い隠し、その指の一本一本を誘導する。オレのチンコが気持ちいいようにカリ首をくすぐらせ、ベストな握り具合でシコシコ指せる。親指が時折尿道を刺激して先走りを全体に絡めるように。
「はぁ…はぁ…んん…わかったわ…。熱いぃ…それに、ぐちゅぐちゅ先走りが絡みついてきてる…」
オレの誘導に従ってチンコを握る淫らな婦警。自覚はないがめちゃくちゃエロい顔をしているし、息が荒い。
「ほら、竿をもっときつく握って、カリを擦れ。やさしくな」

「こ、こう?」
すっかりオレのデカチンコを凝視しちまって仕事のことなんか忘れているらしい。指示通りコシュコシュオレのチンコを握りながら手コキの仕方を教えていく。
「おおきいぃ…。スピードはこんな感じで…先の穴を時々クリクリしてぇ…デカチンポが私の手の中でピクピクしてる…」
言われるがままに手コキのテクニックを取調室で学んでいく婦警。
「ああ、そうだ。いいぞ!お前手コキのセンスあるわ」
「そ、そうかしら…。それはよかった」
そう言いながらもまんざらではなさそうだ。オレが手を離しても言われたとおりのやり方でしごき続ける。滑った音とシコシコする音だけが響く。
「そろそろ出すからな」
そう言ってオレは彼女の両手で亀頭を覆わせて疑似ホールのようにしてこすらせる。すぐに滾ったオレのチンコがイケメンザーメンを吹き出す。
「っー?はぁぁん…熱いのが私の手の中に…私の手がこんな男にレイプされてるぅ…♥」

ビュッビュッビュウウっと彼女の白手を汚すザーメン。切なげなため息とともにゆっくりとチンコの先端をまだ乾いている部分で優しく拭くジュンコ。取調室にオレの濃いザーメンの男臭いにおいが充満する。
「んふぅ…すごい匂いだ…」
そう言いながらもオレのザーメンまみれになった手を確認してその匂いを確認する。あー、もうこりゃぁだめだわ。完全に落ちちまってる。
「っで、どうするんだ?」
そうオレのザーメンをうっとり見ているメスに聞く。
「どうするってなにを?」
不思議そうな顔で聞いてくるジュンコに思い出させてやる。
「おいおい、バカなケーサツ官だな、お前。ジュンコのことレイプした容疑でオレは呼び出されたんだろ?事情聴取っつーの?コレで終わりで言い訳?」
この雰囲気ならこのままコイツをハメてやってもいいが、まぁまだもう少し焦らしたほうが面白いだろうな。後少しでコイツ自分から股開くようになるからな。

「あ、…ああ。…確かに、そうだったわね。いいわ、もう終わりよ。帰っていいわ。協力感謝するわ」
我に返ったらしいジュンコがいつもの感じでいって取り繕う。
「ジュンコ、じゃぁまたな」
そう言ってオレはジュンコの体を再び抱きしめてやる。
「もう、いいから！」
怒ったように立ち上がる。だが、彼女の制服のスカートには隠せないほど大きなシミが付いてしまっている。
「ああ、その染み何とかしたほうがいいぜ。それから、次我慢できなくなったらメールくれよ」
そう言ってオレの名刺を差し出す。
「もう二度とあんたの顔なんか見ないわよ」
そう言いながら名刺をひったくるようにして取り上げるメス。お前がどう思おうがどーせメールすることになるんだがな…。

七月：任務中の情事

ははは、思ったとおりジュンコは結構長く付き合って結婚までした男では満たされなくなっちまったみたいだ。まぁ、思ったとおり。というか、案外時間かかったほうかも。

最近頻繁にメールが来るようになった。大半が結婚したばかりの旦那への愚痴だ。最初にレイプしてからずいぶんかかったが、アホなメスにしてはジュンコは粘ったみたいだ。

旦那とセックスの回数を増やしたり、婚約、結婚と話を進めることで彼氏への思いを確認したり。まぁそう言ってもそーいう気持ちの問題と体の問題って違うわけで、ジュンコがどんなに旦那を愛そうとしても一旦オレのテクで気持ちよくなることを覚えちまった欲求不満な体は納得できねーってわけだ。そして体を制した男がメスの心も奪えるってわけだ。

先週から頻繁にジュンコからチャットが飛んでくる。明らかにヤりたがってる。それをわかっていて更に一週間焦らしてやる。
そして今日、オレはジュンコを呼び出した。とある婦警さんのコスをしたオンナとイメクラできる風俗の前だ。昼間だから店は閉まってるが店主から使用許可は当然貰ってる。
勤務中のガチの婦警、ジュンコがそわそわしながらその店の前を行ったり来たりしてる。笑えることに一〇分も早い。どんだけ期待してるんだか。
「おいおい、ジュンコはえーな」
そうわざと一〇分遅刻していって声を掛けてやる。
「あ…ああ…いったいこんなとこに呼び出して何のよう?」
遅刻に対してはなにも言わねーとか、昔のジュンコだったら多分ありえなかっただろーが、すっかり従順になっちまって。婦警さんが風俗店の前だけピンポイントで二〇分もパトロールとかマジ笑える。そんじゃぁはいろっか。

「ジュンコ結婚したんだって？おめでとー。今日はさ、この間の取り調べの続きしようと思ってココにしたんだわ。大丈夫、すぐに終わるから。ちゃんとパトロールしてましたって言い訳できるぜ」
そう、警官の制服の上からケツを掴んで店の中に連れ込む。はは、コイツケツ揉んでも抵抗しやがらねえ。っつか、もじもじして、ひょっとして既に濡れてんのか？
「ありがとう。時間のことは…大丈夫よ。このまま昼休みに入るから」
何が、『大丈夫よ』だ。澄ました顔しやがって結婚したばかりの欲求不満な体かかえて犯されにきたくせに。
「ほら、ここがオレらの今日の取調室でーす」
イメクラルームにジュンコを押し込む。パイプ椅子が二脚向かい合って置かれてる。そのうちの一脚にオレが座る。
「ふけーさん、ほら取調べしてよ」

わざと茶化したように言ってケツを押してもう一つの椅子の方へ向かわせる。だが、ジュンコは向かい合っていたパイプ椅子のうちの一脚を持ってわざわざオレの隣に来やがった。まさにこの間のセクハラ取り調べのときと同じ状況を今度はジュンコが自分から用意しやがったのだ。

「じゃぁ、またジュンコがオレのチンポ出してほしーな。所持品検査っつーの？ジュンコ、やってよ。オレの持ちモノ見たいんだろ？」

そーやって促してやると、白い手袋に包まれた手をジュンコが伸ばしてくる。はじめはオレの下半身を遠慮がちにぽんぽん叩いていたが、徐々にその手つきがいやらしくなってくる。なでるように股間を触り、金玉をズボン越しにもみもみする。とんだビッチだ。

「ず、ずっしり重いわね…何を隠してるの？」

そう言いながらノリノリでオレの与えた役割を演じるイメクラ取調室のリアル婦警。ってか、ジュンコの中ではそーいうプレイしてるつもりなんだろう

が、職務中にやってる時点でとっくにアウトだ。まぁ、このバカメスは気がついてないだろーが。
「ああ、おっきい!!」
パンツからボロンと出てきたチンコに浮気妻が歓声をあげる。すっかりオレのデカチンコに見惚れちまって目が離せないって感じだ。しかも命令しないでも引き出したチンコをしごき始める。竿に指を絡めこの間教えたとおりカリ首をコリコリ指先でくすぐる。
「っで、旦那にオレの教えた手コキやった?」
オレのデカ魔羅を潤んだ目でみているジュンコにふざけたようにきいてやる。彼女の指はシコシコ教えたとおりに竿を握っている。
「…やったわ」
不満そうな表情でそういう。もうオレの聞いたことは何でも答えてくれるってわけだ。すっかり観念してオレのチンコにラブったってわけだ。

「おいおい、ジュンコ。不満そうだな、あのテクで満足しなかったとか？まさか、即イキでそのあとエッチできなかったとか？どっち？どっち？」
表情見りゃァ答えは想像できるが、コイツの口から旦那のチンコの感想を言わせてやる。
「すぐイッちゃったのよ…」
不満そうな顔でいうふけーさん。
「アハハハ、それでジュンコは欲求不満で残されたってわけだーどんぐらいもったんだ？ジュンコの旦那？一分？二分？」
「…すぐよ…すぐ」
ためらったように言いながらも、きゅっと強めに肉棒を握りなおすあたり無意識にオレのチンコと比べてるってわけだ。大抵の男はオレに敵わねーってのにな。
「マジかよ、それ以下とか。男として不能じゃね？」
「もう、言わないで…あぁぁん。あの人のことは…いいでしょ…」

そう言恥ずかしそうに顔を臥せながらもオレのチンコを手放さない新妻浮気婦警。オレの方もジュンコのスカートの中に手を突っ込む。ウワッ、何だこれ、触ってねえのにオレのチンコしごくだけでコイツ笑えるほどに濡れてやがる。

最初にあった時はあんなにお高くとまってやがったのに今じゃぁこいつはとんだビッチだ。

「えー、オレ、ジュンコの旦那のこともっと知りたいけどな。チンコのサイズとか。ほらさ、折角オレの教えた手コキテクの練習台になってくれてるわけだし」

「そんな言い方…しないで…んふぅ」

「イヤイヤマジだって。今後も手コキしてやるだろ？」

「…もしかしたら…」

「ほらな、やっぱジュンコの手コキ練習台じゃん。ほらほら、旦那のサイズしごくみたいにしごいてみてよ」

そう言って急かすようにパンツの中でガチ勃起済みのメス婦警クリをクリクリしてやる。
「はぁぁんん！こう、こんな感じぃ」
いやがるふりだけしながらも従順にオレの言うことを聞いて根本のところでジュンコの指が細かく上下する。まるでくすぐるみたいだ。
「うっは、なにそれ！ちっちゃ、オレの半分以下じゃねーか」
「んんっ…言わないでぇ…はぁん」
もう完全にショーツの中は水浸しで床までたれてやがる。旦那の短小じゃぁ満足できねーはずだ。指をかき混ぜるだけでグチュグチュエロい音が立って泡立ったラブジュースが漏れてくる。
「ハハハ、すっかり感じてるくせに。なんだこのグチョグチョは！」
手マンで指にまとわりつくジュンコのラブジュースをこれ見よがしに音を立ててみせる。トロトロの透明マンコ汁がオレの指の間で糸を引いて垂れる。
「あぁぁん…やめろぉ！恥ずかしい…くふぅん」

そう顔を赤らめるジュンコ。もう嫌がっている感じはない。
「ったく、発情ビッチが…。オラ、こっちにケツ向けろや！」
そういってクイッとクリをつまんでやる。始めてみたときから一回りはでかくなってるあたり発情ジュンコは満足できなくて相当オナっているようだった。
「ひゃぁぁ！そこ、つままないでぇ！」
黄色い声をあげながら震えるジュンコがよろよろと立ち上がる。欲求不満の熟れた人妻の体、デカ尻が揺れる。
「んくふぅ、そこ！弱いのぉ…」
そう言いながら立ち上がって前傾姿勢の婦警のデカ尻が誘うように揺れる。すっかりオレのチンコに恋しちまって我慢できないってわけだ。ぐっとその引き締まった腰を掴む。物欲しそうに期待して震えているジュンコの体。パンツをずらすと見えてくる物欲しげに震えているピンク色のビラビラ。ツーっと溢

れ出た愛液が糸を引いて地面に落ちる。その欲張りな割れ目にかってこのバカメスが拒絶したオレのデカチンポを容赦なくぶっこむ。
「あぁぁん!デカチンポきたぁぁ!」
すでにじゅんじゅん濡れきった割れ目にオレの分身を突っ込むと嬉しそうにメスが歓喜の声を上げる。
「おいおい、いきなりすげーよさそうじゃん」
「だってぇ、ぐりぐりって私の中広げられてて…んんんっ…あの人とぜんぜん違う…」
お前の中もオレに絡みついてきてやべーけどな。ヌルヌルのヌプヌプでマン肉が柔らかくチンコを包み込んできやがる。
「中ってどこよ?オレに教えろよ、婦警さん」
「んんふぅ…オマンコ!オマンコぉ」
「ちげーな。ジュンコのマンコは浮気マンコだ。ほら、いってみ?」

つい数ヶ月前だったら言わなかった言葉もサラッと言ってしまう。だが、まだ物足りねぇ。もっともっとビッチバカにしつけてやるぜ。新妻ジュンコさんよぉ!

「あぁぁん!…うっ浮気マンコ!浮気マンコ広げられてるぅ…んふぅ」

そう言いながらキュッキュッと締めつけてきやがる。旦那のものとは違うオレのデケぇチンポをコレでもかとマン肉が抱きしめて、愛してきやがる。ジュクジュクに濡れた女の体。鬱陶しいケーサツの制服がオレのチンコの上で前後する。

「誰の何がジュンコの浮気マンコ気持ちよくしてるんだ?」

「んふぉ…リョージの、リョージのデカチンポが私の浮気マンコをぉぉ…あはぁぁ…き、気持ちよくしちゃってるのぉぉ」

「こうか?」

「そう、そう!あんんっ!そこ、そこイイのおお!デカチンポすごい!グリグリ浮気マンコ気持ちよくされちゃってるぅぅ!んふぅ…。」

グリグリジュンコの中を擦り上げる。面白いようにあんあんメスの声が響き渡る。
「んんぐぅっふはぁ…すごいぃぃ…!リョージのデカチンポぉ…んふぅっズンズンってぇ奥まで来てるぅ…!くふぅああん!」
グイグイデカ尻を押し付けて貪欲にチンポを咥え込もうとする職務時間中の人妻婦警。フェロモンドパドパだしてメスの匂いを振りまきながらケツ振ってきやがる。
「あぁぁん、すごいぃ…!おかしいの!おかしいのに…気持ちいいのぉぉ!デカチンポにっ、デカチンポにズンズンって…あぁぁんん!こっ壊されちゃってるのぉ!ダメ、ダメぇ!ダメなのにぃい!」
ジュンコの胸を制服の上から揉みしだく。柔らかいデカ乳が制服の下でムニムニ揺れる。
「おいおい、ノーブラかよ!ノーブラで巡回してる人妻婦警ってヤバイな」
そう言いながらすっかり固くなって浮き上がった乳首をキツめにつまむ。

「ふぁぁああん！だって、リョージがぁ、リョージがそうしろって言うから…、はぁんんっ！乳首すごいいい！」
「言い訳すんじゃねーよ！オレが命令すればノーブラでマンコ濡らして期待してくるくせに。マンコが締め付けてんだよ！」
「ひゃああ！デカチンコ浮気マンコの一番奥にぃキてるぅう！あぁああ！いい、いい、デカチンポの捜査いいのぉお！スゴイ！すごいいい！浮気マンコ感じちゃってりゅうう♥♥！」
キュンキュンしやがってこの浮気メスマンコが。子宮口をゴリゴリ擦り上げてやる。
「あぁぁんん！私ダメになってるぅうう！んあぁっっ！すごい！すごいいい！イキそう！んんはぁぁああ！イク！イクっ！イってるうう！」
全身を反り返らせて快感を貪るメス婦警！初めて会った時はオレのことをレイプ犯として憎んでいたくせに今ではこのザマだ！オレのチンコハメられて嬉しそうにイッてやがる。

快感に膝をがくがく笑わせて震えるメス婦警の膣奥を更にガンガン押し付ける。
「ひゃぁぁあぁ!キタァ!イッてるのにぃ…んふぅ容赦ないリョージの挿入ぅぅ…」
強く拒絶するわけでもなく快感に身を任せてオレをすべて受け入れるジュンコ。
「おいおい、オレはまだイッてねーぞ!もっとケツ振れや!」
「んあぁぁ!ひゃぁい…」
イメクラルームにモノホンの婦警の嬌声が響き渡り激しいパンパンという腰のぶつかり合う音が響く。オスとメスの肉がぶつかり合い、メスがヨガり鳴いてオレに媚びる。
「あぁぁん!デカチンコぉぉ、デカチンコいいのぉぉ!あふぅ…!ズンズンって私の浮気マンコぉ…突き上げてるのお!らめなのにぃぃ…気持ちよすぎるのおお」

「おいおい、まだまだこれからだし！ジュンコの胸がオレのデカチンコでトキメイてるんだろ！次は一緒にイッてやるぜ」
そう言って激しく胸を揉みしだき、乳首をつねりながら犬のようにバックからメス犬婦警をガンガン犯す。
「んあああ！はげ、激しいいぃぃ！デカチンコがぁぁ、ズンズンってぇ…んんふぅ…浮気マンコ突くたびにぃ、ひゃぁぁぁん！あふはぁん！トキメイちゃってるのぉ！」
「オラオラ！オレに言ってよ！デカチンコ愛してるって！」
そう命令した瞬間、ビクンっとジュンコの体が震える。
「そんなのぉ…そんなのぉ…んふぅぅ…言えないわぁ！デカチンコ愛してるなんてぇ！あああんっ…言えないぃぃのぉぉ」
「バーカ、もう言ってるくせに！オラ、もっと言えよ！」
パンパンっと激しく突く。口では拒絶しながらも体はドンドンオレに事を求め、キュッキュッとチンコを締め付けてくる。

「んあぁぁ!すごい!スゴイぃぃ!デカチンコすごいいい!デカチンコ愛してるぅぅ!ずんっずんってぇぇ…ひゃぁぁん!イカされちゃうぅぅぅ!」
「おぅ、オレもそろそろイクぜ!中に出すぞ」
そう宣言した瞬間、またマン肉が震える。すっかりマゾ化しちまってわかりやすいオンナだ。
「ダメ!それはダメっんんほおお…よぉ!」
「バーカ、言えてないってーの。ってかオレがお前の言うこと聞くと思ってんの?バーカ、ジュンコが言っていい鳴き声はデカチンコ愛してるだけだから。オラ言えよ!」
クライマックスにとめどなく湧き出るジュンコの愛液をかき出すようにガンガン腰を振る。オレの声にジュンコの喘ぎ声が面白いほどに連動する。
「ああ!ひゃぁぁ!…んっ!んふぅぅ…ふはぁぁああ!んふっ!ああぁああんー!またっ、またイッちゃう。デカチンコ愛してる!イキそう!イキそうう

う!!!じゅんじゅんってええ浮気マンコぉぉデカチンコ愛してるうううううう!」

まるでビブラートのようにジュンコの声が震えて嬉しそうにメス肉がきゅっきゅっと痙攣して締めてくる。当然その愛に応えるためにオレは彼女の一番奥にグリグリ亀頭を押し付けてたっぷり逆流し始めるまでドクドクとオスの開館とともに欲望と征服の象徴のイケメンザーメンを注いでやる。その間結局逃げることもせずに切なそうにケツを押し付けてくる浮気ジュンコ。バカなメスだ。

「ひゃあああ…出てる…。また出されちゃったぁ…」

そうつぶやくジュンコの体にまだ硬さを失わないオレの息子を更に叩き込む。

「んふぅぅ…すごい…まだ固いぃ♥デカチンコ愛してるぅ!ダメなのに!私愛しちゃってるうう!…んんっふぅ…びくんってデカチンポまた私の中で動いたぁ♥…あぁぁん…んふぅぅ」

まぁ、時間的にはあと一回くらいしか出せないだろーが、とりあえずもうジュンコはオレのものになっちまったな。もうここまでコレば戻れないし戻りようがないだろう。

八月：旦那の出張中に…

すっかりジュンコはオレの物になった。今ではオレ好みの下着を着てオレ好みの言葉を話す普通のオレのセフレってわけだ。オレ好みの香水を旦那と一緒に探したって話を聞いた時はマジでウケた。今日はジュンコの家の近くで待ち合わせだ。半日有給を使わせてオレのために時間を作らせた。

「あ、リョージ！」

指定の場所に三〇分遅れでついたオレをビル陰に引き込んで抱きしめる欲求不満の制服婦警。潤んだ瞳が物欲しげにオレのことを上目遣いで見上げる。つい数ヶ月前に犯罪者として冷ややかな目で睨みつけていたメスがもうオレのことしか見えていないみたいだ。

「ちゅっ！んん…ちゅぷっちゅるるる！んふぅ…れろ～！ぢゅぷ…ちゅっちゅる！」

積極的に自分から舌を絡めつつオレの下半身をねちっこく撫で始める。キンタマをズボンの上からマッサージして、布越しに竿を扱き上げる。

「おいおい、気がはえーってーの。それより頼んどいたのくれよ?」
そう言うと頬を赤らめてまるで少女みたいな顔をで上目遣いのジュンコが言う。
「はい♥これよ」
そう言ってオレの手に渡されたのはジュンコと旦那の家の鍵だった。
「明日から一週間旦那は出張なんだろ?」
「うん…だから…」
そう照れくさそう頬を染めてオレを潤んだ目で見る瞳に罪悪感はまるでない。ジュンコの手は相変わらずオレの股間をサワサワと撫でてくる。
「わかってるって。一週間ジュンコと同棲してやるって」
「嬉しい♥チュッ」
まるでオレの新妻のようにキスをして再び舌を絡めてこようとするジュンコを引き剥がす。まずはこれから一週間オレが住む明河夫婦の家という名前のトイレに案内させる。ジュンコはセフレでザーメン便器で便器があるのはトイレだから明河家はオレのトイレってわけだ。

制服姿の婦警と恋人つなぎで彼女の家に案内させる。そして新婚夫婦の二人の愛の巣の玄関でオレは命令した。
「じゃぁ、まずはジュンコの結婚指輪ちょーだい」
「ええ、本当にするの…？」
さすがに戸惑った顔をしながらも顔を赤くして薬指に手をかけるジュンコ。もうノリノリじゃんかこのビッチが！
「もちろん。これからはジュンコはオレのものだし」
そういった瞬間、バカなメスが嬉しそうに赤くして戸惑うことなく結婚指輪を薬指から抜き去る。
「そうね。じゃぁコレ預けておくわ」
安っぽい指輪だ。コレがジュンコの旦那の給料三ヶ月分か。預かってる間に勝手に知り合いの宝飾店に送ってジュンコのクリピアスに改造しちまうんだけどな。一週間後には改造費用の請求書と一緒にジュンコのクリに返してやる予定だ。
「うっす、じゃー、まずはオレの服脱がせてよ」
「えー？…ここで」

困ったような顔のジュンコ。まっ、どーせもうオレのメスだ。しっかりしつけてやるぜ。
「トーゼンだろーが、今日から一週間はオレの家なんだろ。ジュンコにいつでもハメられるように家ん中ではオレは裸な。ジュンコはオレの指定する恰好な。おら、脱がせろって」
そう命令するとジュンコはもう逆らえない。自宅の玄関でためらいながら職場の制服のままオレのズボンに手を伸ばす。この一～二週間、結構使ってやったせいですっかりオレのズボンを脱がすのにも慣れちまった。カチャカチャと戸惑うことなくベルトを外し、ズボンを下ろす。ボクサーパンツの下で存在感を放つオレのチンコのサイズにメスの顔つきになる。鼻をひくつかせてトロンとした熱に浮かされたジュンコの発情顔。
「じゃぁ、上も…」
そう言って甲斐甲斐しくオレのシャツを脱がせにかかる。まっ昼間だってのにこれから起こることを期待して形の良い肉感的なケツがケーサツの制服の中で揺れる。多分もうこれから起きることを期待してここ数ヶ月でだいぶメスらしくでかくなった胸もトキメイているんだろう。

「んふぅ…すーはー！パンツも脱がせるわね」
鼻息荒くジュンコがそう言う。もう殆ど頬ずりに近いほど顔を近づけていやがる。さっきまで自宅で旦那の存在を少しは気にしていたのに、もうすっかり忘れちまったみたいだ。
「ああ…デカチンコ！」
嬉しそうに黄色い声をあげる公僕。メロメロのメスの顔が嬉しそうに歪んでいる。
「そんじゃ、ベッドに連れてってよ。チンコ握っていいぜ」
我慢出来ないという顔にそう言ってやる。嬉しそうにオレが躾けたとおり少しきつめに握って、裏筋をコリコリしながら夫婦の寝室に連れて行く。浮気中だってのにすっかりノリノリでケーサツの白手を汚すビッチ妻ってわけだ。
「おじゃましまーす！」
きれいに片付けられたベッドルームに全裸で侵入する。
「おー、いいじゃん！じゃっ、ジュンコ教えたとおりやってよ」
「本当に…やるの？」

不安そうに言うが、先走り汁指に絡めながら言っても説得力ないってーの！相変わらず笑えるメスだ。しかもそう言いながらもちゃんと準備しちまってるしな。

オレはわざわざカメラをセットする。そのうち勝手にAV化する予定だからだ。顔を赤らめながらもジュンコがカメラ目線で言う。もともとのキツめのバリバリオンナっぽくセクシーに足を組んでいる。

「明河順子よ。これから一週間、旦那の出張中、家にいる間はリョージの奴隷になります…」

まっ、一週間後には旦那の出張中と言わずオレのチンコ奴隷になっちまってるけどな。夫婦のベッドの上で素手の物欲しげに腰をもぞもぞしているくせに一週間限定とか何様だって感じだ。

「おいおい、いいのかよ！そんなこと言っちまって。オレはサイテー男の性犯罪者なんだろ？旦那と結婚して半年も経ってないじゃんか」

「だって仕方ないじゃない！あの人のじゃ気持ちよくなれないし、リョージすごい気持ちよくしてくれるし。家で一人でいるときくらいイケメンと楽しく遊びたいの！！」

あーあ、言っちまった。しかもオレのチンコ凝視しながら。サイテーの犯罪者として出会ったってのにカメラの前でマンコ濡らして奴隷宣言かよ。
「ひっでー!でもジュンコちゃんこっちのほうが好きなんだ」
ベッドの上に立つ。鼻先にチンコを突きつけてやる。明らかに発情して荒くなった鼻息がチンコの先にかかってくすぐったい。カメラの前だってのにもう我慢出来ない顔でジュンコは無意識に舌でオレ好みの派手なルージュの唇をペロッと舐める。
「んふぅ…そうよ。あの人のおちんちんってコレくらいしかないんだから」
そういって指で指し示してみせる。
「ちっちゃ!それでジュンコちゃん欲求不満なんだ!そりゃ、浮気しても仕方ないな!旦那のチンコが短小なんてジュンコカワイソー!」
二人で爆笑する。エッチの前に旦那のモノと比べる習慣をつけさせたせいで、はじめは抵抗していたジュンコもすっかり旦那のモノをバカにするのに慣れちまった。それどころかオレにしているプレイを旦那にしてその無様な結果を報告までしてくる。

「そうなの…。私可愛そうよね。この前、口でしゃぶってあげたら舌先でなでただけでうっすいザーメン漏らしちゃったんだから」
クスクスと嘲笑するジュンコ。その表情はデカチンコを咥えることができるメスとしての優越感と旦那の不能への軽蔑が含まれちまっている。
「でね、おもらしして言うのよ『ごめん。口の中に出しちゃって…』って。バーカー、謝るのはそこじゃないってーの。うっすくてサラサラ、量も少ない精子力低すぎなザーメンについて誤ってほしーっての！」
オレの口調を真似する。旦那を小馬鹿にする時はオレがジュンコにする言葉遣いをいつの間にかなぞるようになっている。
「それな！じゃー濃いモノホンのオス汁のために、まずはジュンコちゃんのこの一週間の抱負？だっけ、発表してよ！そしたらチンコ咥えていいぜ」
そう言うとジュンコが更に嬉しそうにする。
「はぁ…。これから一週間たくさんこのデカチンコで浮気マンコを気持ちよくしてもらうの。毎晩この夫婦の寝室で一緒に思い出作りするのよ♥たーくさん私の浮気マンコにデカチンコぶちこんでもらって、毎朝ザーメンいただいたロで出勤するの♥ふぁ…考えただけで私、ジュンジュンしちゃうのぉ♥」

「ハハハ、ジュンコがジュンジュンするのかよ!おもしれぇ、浮気マンコジュンジュンジュンコかよ!」
ちょっとツボって吹き出す。笑うたびに揺れるオレのチンコをジュンコの視線がが追いかける。
「はい♥浮気マンコジュンジュンジュンコで〜す♥」
そう言いながら我慢出来ないというように物欲しげにジュンコの顔が近づいてきて、オレのデカチンコをパクっと咥え込む。最初に会った時に未成年強姦容疑でオレを怒鳴りつけてたメスが今じゃ嬉しそうにしゃぶりついてきやがる。
熱い口内に亀頭が包み込まれる。オレの好きなカリ首に婦警のざらざらの舌が擦り付けられる。軽く甘噛して裏筋の垢をこそげ落とす。全部オレの教えたとおり、一番オレが気持ちいいやり方だ。もとが真面目なせいでエロいこともわざわざ練習するからすっかりそこらの風俗嬢よりうまくなっちまってる。
「はむっ…んふぅ…ふはぁぁ…おおひぃ…」

そう言いながらガンガンねちっこく絡みついてくるジュンコの舌。物欲しげに口の端からこぼれるよだれ。ちなみにジュンコの練習相手はオレが買わせたディルドーだ。旦那の候チンコじゃ練習にもならなかったからな。
「チュッ…ちゅる!ちゅぷぷぷ…んふはぁ」
次にオレの排泄器官をくわえ込みながら尿道口を軽く舌がくすぐり始める。はじめはチンコの咥え方も知らなかったくせに尿道口を今ではためらいなく掃除できるオレの便利なセフレになったわけだ。
「じゃっ、婦警さんのきつきつバキュームやってよ」
そう命令して軽く頭をなでてやる。ジュンコにやらせているお気に入りのプレイの一つだ。
「んんふぅ…レイプぁー、デカチンコをぉ…れろれろぉ…からザーメン徴収ぅするのぉ…ふはぁ…。レイプぅ…レイパーデカチンコぉ…しゅるっちゅる…れろぉ〜」
チンコを口に咥えながらそういうジュンコ。『レイプ』と発音するときに舌がカリ首をゾリゾリするのが好きだから積極的に言わせている。そして…

「ずずずずず!!じゅるるる!じゅぶぼぉぉ…んん!はふっぢゅぶぶぶぶぶ!んんぶぶぶぶぶ!ぢゅぢゅぢゅぢゅぢゅぢゅぶぶぶぶ!」
激しく理知的な顔がぶっ壊れて醜くなるほどの超強力バキュームだ。舌を震わせて裏筋をくすぐりながらジュブブブブっと激しく吸い付いてくる。思わず気持ちよくてジュンコの頭を掴んで喉マンコの一番奥まで挿入する。
「んごっ!ンヴヴヴずず!じゅぶぢゅるるる!」
バキュームされながらイラマチオしてやる。口内が狭くなってまるでオナホみたいだ。しかも吸い付いてくる喉マンが尿道を刺激してきて絡みつく唾液がローションみたいだ。
「ぢゅずずず!んぷっちゅぷっじゅぶぶぶ!」
前後に頭を動かしながら快感を作り出す。口から出てくる竿は完全にジュンコの唾液でコーティングされてててらてら輝いている。
「んふぅ!んっ!じゅっ!!ぶぶぶっっふぅぅ!っぷはぁ…」
唾液でコーティングされたフルボッキチンコを口から出したジュンコが舌を出していたずらっぽく上目遣いで言う。
「はじめの一番濃いのは、私の中にほしーな♥」

完全にスイッチが入っちまった顔だ。
「おいおい、夫婦のベッドの上で浮気相手に中出し懇願とかジュンコサイテーだな」
そうからかいながら彼女の頭をなでてやる。オレの好みの香水がふわっと香る。
「だって、もー私我慢できないし…。あの人は出張行っちゃったから、私はあの人の妻じゃなくてリョージのセフレだしぃ…。ね、して？」
そう言いながらもジュンコがしなだれかかってオレの上に乗ってくる。
「まったく、セフレのくせに欲張りなやつだな！」
「だってあの人のおちんちんコレぐらいしかないしぃ、物足りないのぉ！私我慢できないの！アイツのよりおっきぃデカチンコほしいのお！もう、いいよね？レイプしちゃうわ！リョージのデカチンコ襲っちゃう淫乱婦警なのぉ！淫乱婦警強姦しちゃいますぅ！はぁぁぁん！」
そう言いながらオレを押し倒してくる。
「おいおい、オレのことをレイパーだなんだって言ってたくせに、このビッチが」

「ごめんなさい！レイパーは私でしたぁ。だから浮気マンコにデカチンコ欲しいのぉ！ちゅっちゅぷぷ…ぢゅぷぷ…」
オレの唇を奪い積極的に舌を絡めてきやがる。どんだけビッチなんだって感じだ。すっかりオレの教育のせいでビッチに目覚めちまって。まっ、今はタガが外れるのは発情したときだけだが、この1週間が終わる頃には常にタガが外れてる頭空っぽなビッチ婦警になっているはずだ。
「れろ～♥ちゅぶ！んふぅ…はぁ…デカチンコぉ…すごい…！来てぇ、今日我慢できなかったからノーパン穴あきパンストなのぉ」
そう言いながら人妻が夫婦の寝室で自らの蜜壺に浮気相手の生殖器官を招き入れる。すっかりトロトロに濡れた新妻マンコがオレのカリ高でカチンコに触れる。
「んん！リョージぃ、私の浮気マンコにいらっしゃいぃ…んんっ…ふぅ…」
そう嬉しそうにささやきながらしっかりオレのデカマラサイズに拡張されたマンコがぐいぐいと一物を愛液でヌルヌルコーティングしながら飲み込んでいく。

「おお、じゃぁ旦那さんにわりーけど、お家にお失礼しちゃって奥さんのマンコにおじゃましまーす！ついでにオレ専用にリフォームしちゃうけどいいっすか？お宅の奥さんの入り口狭すぎるんで」
「んはぁ♥いいわぁ！アイツの許可なんていいのぉ！はぁぁん！んんっ！はぁ…あぁあんっ、リョージのはぁお邪魔じゃないのぉ…。お邪魔はアイツの粗チンよぉ！ンあっキタぁ！そこ、ぐりぐりってこすられるのぉ…いい…！こんなのアイツじゃぁできないのぉぉ」
自らオレが開発してやったGスポットをチンコに押し当ててぐりぐりと快感を貪る。旦那のことを『アイツ』呼びしちまって。女の恋は上書き可能って言うけど完全に俺のチンコで上書きされちまったってわけだ。
「はぁぁん！私…制服着たままレイプしちゃってるぅ…んあっ！ダメなのにぃ…いいのぉ…んんふぅ」
恍惚と歓喜の表情を浮かべながらそういうジュンコ。騎乗位で腰を振りながら気持ちよさそうに嬌声をあげている。

「ダメなことないっすよ！だってオレチンコでかいし、ファックうまいし、旦那さんより若くてイケメンっしょ？メスだったら押し倒すのって普通じゃんか？」
「んあぁぁ…そう、そうよね！リョージがぁ…凄テクすぎるからぁ…はぁぁん…仕方ないいのぉ！あぁぁん！メスだったら…ふはぁ…このデカチンポいいのぉ！アイツのなんかぁ…やぁぁん…比べ物にならないのぉ！ああん！んなっ、奥にあたっったぁ！んふぅぅぅ…ゴリゴリこすってるぅ」
　オレのチンコの上で熱くうねるメス肉を震わせながらバカみたいにジュンコが跳ねる。オレが一切腰振っていないにもかかわらずデカチンコを扱き上げるために生まれてきた人妻マンコが勝手に上下して締め付けてくる。
「ジュンコひどいケーサツっすね！男をレイプしてくるとか！でも、まっ、これでオレがジュンコをレイプしたときの気持ちわかったっしょ？」
「んんん！わかった！わかったぁ！はああん！レイプもをぉ、仕方ないわぁ！あんっだってぇエッチ我慢できないのぉ！あぁぁぁん！でっデカチンコあるのに使わないなんてぇ…んふぅ…ありえないぃ！」
「オレがあの時お前をレイプしてやらなかったらわかんなかった喜びだろ？」

そう言いながら初めてチンコを軽く突き上げてやる。一番深くまで入っていたタイミングに合わせたから、ほんの少しでも効果てきめんだ。ジュンコの体がビクンとオスに使われる喜びに震える。
「ひゃぁっんんん!そう、そうですぅぅ!リョージがあの時…んんっふぅ…レイプしてくれなかったらぁ…ひゃぁぁぁん…知らなかった幸せなんオオオ♥」
「そんじゃぁ、感謝の気持ちとしてこれから一週間、ジュンコはオレのことレイプし続けてよ!我慢すんじゃねえぞ!パコリたいときはいつでも押し倒しておねだりだ!」
そう言ってツンツンすると簡単にキュンキュン反応してきやがる。
「…んはぁぁ!それっイイぃ♥パコリたい時はレイプするぅ♥」
「我慢出来ない時はこう言えよ『年増人妻浮気マンコにデカチンコお恵みください!リョージ様』ってな」
「あああああっ、そんなぁ…そんなのひどいよぉ!私まだ年増じゃないのぉ…んふぅ…リョージ様」
「うっせーよ!チョーシのるなよ!年増のくせに、いらねーのか?この浮気マンコがぁ」

あーあ、最初はあんなに抵抗してたくせにすっかり受け入れてマゾ化しちまった。まー、オレにかかればメスなんてどいつもこいつもこんなもんよ。強いオスに屈服させられると嬉しくてキュンキュンしちまう。
「ひゃぁぁん…そんなぁ…!あぁぁんん!それはダメぇ、うっ、浮気マンコにいデカチンコほしいのぉぉ!」
「おいおい、『リョージ様』と『年増』が抜けてるじゃねえか。おら、言えよ」
下から少し突き上げて説得してやる。たったそれだけのことで簡単に受け入れるジュンコ。
「あんっ!はぁぁと、年増浮気マンコにぃ…んほぉぉリョージ様のおデカチンポグチュグチュかき混ぜてぇ!!ジュップジュッぷ使ってほしいのぉぉぉ!浮気マンコ我慢出来ないのぉぉ!はぁぁぁん♥
ご褒美に下から大きくグラインドするように突き上げてやる。今までレイプしてきたジュンコの主導権だったのがオレの腰の一振り一瞬でオレのものになる。チンコに上でまるでロデオマシンに乗ってるみたいにジュンコが揺れる。

「んんっっ！しゅごぃぃぃ！しゅごっ！しゅごいのおおお！リョージ様のぉぉデカチンコ！んはぁっ！デカチンコぉぉ好きなにょぉぉ！んんほおおお！年増浮気マンコジュップジュプキテりゅうううう！しゅごい！すき♥すきぃ♥これだいすきなにょおお！デカチンポぉぉぉよしゅぎりゅにょおおおおお！」

オレの腰の上でバカみたいに体をくねらせ、汗をちらしてヨガり狂う婦警。知性ももともとあったクールさもすっかりなくなっちまって一匹の獣になっちまってる。

「イきゅぅ！イクうう！イッちゃうのぉぉぉおおおん！あはぁぁああん♥これしゅごいのおお！きもちよしゅぎりゅう」

「おいおいまだいくんじゃねえ！一緒にイッてやっから一番奥まで咥えこめや！」

流石にフェラから連続でハメたからオレも一発出しときたい気分になる。命令すればジュンコの子宮口が亀頭にキスする感覚がある。ゴリゴリジュンコの孕み袋の入り口が当てられる。

「んっっー!もう…♥ダメ、イクっイクうう!イッちゃうううう!ゴリゴリポルチオ攻められて浮気マンコイッちゃうううー!デカチンコで浮気マンコイカされちゃうううう」
キュンキュンっと愛しげにジュンコの体が絶頂に震えてチンポを締め付ける。
「あああああ♥でてりゅうううう!リョージ様の濃いの出てりゅうううう♥♥」
そう叫ぶとジュンコのふくよかな肉体が糸の切れた操り人形のようにオレの上に覆いかぶさってくる。
「あぁぁ…♥いいよぉ♥」
そして絶頂後のけだるい快感の中でつながったまま唇を貪りあう。
「ちゅっ…ちゅ…んはぁ…リョージ様のお匂い…すきぃ…♥」
「ジュンコ、後で飯作れよ」
「うん♥なにがいい?でもその前にもっともっと私にザーメンちょーだい」
淫猥に微笑むジュンコ。コレが最初に会った時に本人さえ気がついていなかったメスの本性ってわけだ。オレのチンコをくれてやればどいつもこいつもマ

ジでちょろいわ。オレは心の中で嘲笑する。イケメンに生まれてよかった、人生イージーモードだぜ。

Slave No.15

あとがき

お久しぶりです。いや、小説を見てくださった方にとってはそんなに久しぶりじゃないかもしれませんね。ほんの二ヶ月前のことですので。まさか二ヶ月で新作できるとは思わなかったんですが、なんだかんだいってできてしまったのでこうしてお見せできました。多分この物語がこの短期間で完成したことに一番驚いているのは私ですね。

いつもっどおり、思ったより早く進めると思ってスケジュールを決めて、ギリギリでスケジュールタイト過ぎたって公開するパターンですね。今回も。でもなんとか完成しました。最近予定ギリギリでのマスターアップでここに書くことがない事が多いですが。

それからこれを書いている時点でヘンタイオジサンも一応新しいキャリアが決まりつつあります。去年から資格の勉強をして、一応それを活かした仕事が見つかりました。とは言うものの経験を積むまでは非正規扱いで働かなければいけないのでもうしばらく同人活動は続く予定です。

勤務開始は七月からしいのでそれまでに抑うつ状態を直して掛け持ちするアルバイトを決めて次の新作の準備をしたいですね。
そういうわけで次はたぶん五月か六月になると思います。

TWITTER(情緒不安定注意)
https://www.pixiv.net/
BLOG(七月までに何かしら新しいことを始めたい)
http://b.dlsite.net/RG30970/
Ci-EN(いつもご支援ありがとうございます)
https://ci-en.jp/creator/1166
PIXIV(ブクマいいねはモチベの源)
https://www.pixiv.net/member.php?id=15214729